

国内経済情勢

概観

鉱工業生産、出荷は2ヵ月連続の減少となった。5月の低下には春闘ストなどの特殊要因も響いているが、生産・出荷の基調は弱含みとみられる。輸出は増勢を続けているものの、設備投資、消費など内需は伸び悩みを示しており、その間にあって生産が抑制されているので、製品在庫は減少をみている。

商品市況は不ぞえ商状を改めず、卸売物価は保合いに推移している。消費者物価もここ一両月横ばいながら前年に比べればかなりの高水準である。

金融面では、金融緩和が企業段階へ浸透しつつあり、銀行貸出の顕著な増加や外為会計の大幅超過の持続から企業の流動性回復が進み、これを背景に大企業では支払条件を改善する動きがみられる。

国際収支は5月には既往最大の黒字を示現し、外貨準備は6月にはいっても引き続き相当の増加となった。

なお、本行は以上のような最近の国際収支の状況にかんがみ、輸出金融に対するこれまでの優遇を改める趣旨から輸出関係金利を引き上げること

を決定した。

5月の生産は大幅の減少

鉱工業生産(季節調整済み、前月比)は、4月-1.6%のあと、5月(速報)は-4.5%と大幅の減少を示した(原計数の前年同月比+0.6%)。財別には資本財輸送機械、建設資材を除き各財とも減少し、とくに家庭電器を中心とする耐久消費財や一般資本財の減少が目だった。このところ工作機械、産業機械等の一般資本財が減産を示しているのは、設備投資の鎮静傾向を映じたものと思われるが、当月の生産低下には春闘ストの多発など特殊事情も影響しているとみられる。

5月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報、前月比)は、-2.9%(船舶を除くと-3.6%)と、生産とほぼ同じ事情によって、2ヵ月連続の減少となった(原計数の前年同月比+4.0%)。

このように出荷に比べ生産の低下が大幅であったため、5月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は消費財、生産財を中心に前月比-1.8%とかなりの減少を示した。もっとも、製品在庫率指数は出荷の減少から113.0と前月(111.7)より上昇したが、月々のふれをならしてみるとおおむね横ばいである(3ヵ月移動平均、2月、3月110.9、4月110.5)。

設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み、前月比)は4月(-11.8%)に

続き5月(速報)も8.5%の大幅減少となった。また、先行指標である機械受注(船舶を除く民需、季節調整済み)も5月は電力、鉄鋼の減少などから前月比-1.5%(4月同-42.1%)と低調であった。なお、建設工事受注額(季節調整済み)をみると、5月は官公需、民需とも増加し、前月比+11.5%となった。

労働関連指標の動きをみると、常用雇用(全産業、季節調整済み、前月比)は1月以来4ヵ月連続して低下したあと、5月も横ばいにとどまっている。また、5月の総実労働時間(全産業、季節調整済み、前月比)は、春闘ストなどの影響から-3.1%と大幅な減少を示した(3月+1.3%、4月-0.8%)。この間、賃金(全産業)は上記事情も響いて4月前年同月比+14.9%のあと5月は+12.1%となった。なお、5月の全国百貨店売上高は前年同月比+14.1%(4月+17.0%)と伸び率が低下したが、これには私鉄ストなどの要因も影響しているとみられる。

卸売物価は横ばい

最近の商品市況をみると、繊維は輸出の増大や生産調整の進展から需給地合いがいくぶん好転し、やや明るさを取りもどしている。しかし、それ以外では実需が季節事情も働いてなお低調であり、在庫水準も高いため、鉄鋼(鋼板類)、木材等総じて弱含みのものが多い。

5月の卸売物価は、上記のような商況の不ぞえを映じて保合いとなった(前年同月比-0.8%)。品目別には、繊維品、石油・同製品、食料品が値上がりの反面、非鉄金属、鉄鋼、木材・同製品等

が下落している。6月にはいつてからは、上旬は前旬比-0.1%、中旬は保合いとなっている。

一方、消費者物価(東京)は、5月に前月比-0.3%のあと6月(速報)は食料や住居費の上昇から0.1%の微騰にとどまったが、前年同月比では+8.1%とかなりの高水準にある。

金融緩和は企業段階にも浸透

6月の銀行券は官民夏期ボーナスの支払などから月中3,616億円の発行超(前年同3,331億円)となった。一方、財政資金収支についてみると、純一般財政は1,909億円の揚超となったが、外為会計が引き続き大幅払超(3,509億円)を示したため、総収支じりでは月中926億円の払超(前年揚超2,713億円)となった。この結果、金融市場では季節的な資金不足月ながら不足幅は小幅にとどまった。これに対し本行は主として短資業者からの債券買戻しにより調節を図り、コール市場は格別の引き締まりをみることなく推移した。

銀行券の月中平均発行高の前年同月比増加率は、5月16.4%のあと6月は15.8%と若干低下した。一方、預金通貨(平残)は前年比4月+20.8%、5月+22.9%と相当の増勢を持続している。これに伴い、手形交換高との対比でみた預金通貨の回転率(季節調整済み)は、1~3月平均1.73回、4月1.71回、5月1.65回と低下している。

5月の全国銀行貸出は、月中7,823億円増と前年増加額の1.8倍の著増となり、月末残高の前年同月比伸び率は19.8%(前月19.0%)と引き続き水準を高めた。一方、中小企業金融機関では、取引先中小企業の資金需要が落ち着いているため、相

互銀行、信用金庫とも貸出増加額は前年同月を下回った。

企業金融面では、銀行貸出の著しい増加に輸出代金の流入増も加わって、手元流動性の回復がこのところ急速に進んでおり、大企業では支払条件の改善を図るほか有価証券投資をふやすなどの動きがみられる。

5月の全国銀行貸出約定平均金利は、月中-0.015%と、これまでの金融緩和期に比べれば下げ足は引き続き鈍い。

公社債市場では、金融緩和の進展とこれに伴う既発債利回りの低下から新発債に対する需要が増勢を続け、事業債の起債規模も拡大をみている。株式市況は、対日証券投資の高水準のほか投資信託や信用金庫など一部金融機関の買い意欲が強いこともあって堅調に推移している。

国際収支の大幅黒字続く

5月の国際収支は、貿易収支の黒字(580百万ドル、前月同549百万ドル)が増加し、対日証券投資も引き続き高水準だったのに加え、輸出前受金の流入が急増したため、総合収支では1,183百万ドルの黒字となり、これまでの黒字記録(本年3月529百万ドル)を大幅に更新した。外貨準備は、5月中1,139百万ドルの著増を示したあと、6月も683百万ドル増加し、月末残高は7,599百万ドルとなった。なお、非居住者の確定利付債券取得については、5月17日以降非上場分の取得が規制され

たため、6月の流入額は著減している。

5月の貿易収支を季節調整後でみると輸出は前月比+5.9%(原計数の前年同月比+28%)と相当の増加を示した一方、輸入は-3.3%(同+3%)と停滞傾向を強めたため、黒字幅は688百万ドルに拡大した(前月黒字535百万ドル)。

5月の輸出(通関ベース)を前年同月比でみると、商品別には船舶のほか、自動車、テレビ、鉄鋼、合繊織物の伸びが著しい。また仕向け先別には、西欧、東南アジア向けはいくぶん鈍化したが、米国向けが同国の鉄鋼スト備蓄買いや港湾スト見越しの早積みなどの特殊要因もあって大幅に増加し、豪州、アフリカ向けなども高い伸びを示した。この間、輸出価格も海外需要の堅調から年初来じり高傾向にある。なお、6月の輸出信用状接受高(季節調整済み)は、前月比+5.3%と米国、アジア、その他地域向けを中心に大幅な増加を示した(原計数の前年同月比+36%)。

5月の輸入(通関ベース)を前年同月比でみると、原燃料が鉄鉱石、原油等を除きさらに増勢鈍化を示し、また鉄鉄、非鉄金属地金、化学製品も前年水準をかなり下回っている。輸入原材料在庫が引き続き水準を高めていることや、輸入承認額(原計数の前年同月比-2%)の動きなどから推して、目先輸入は低調ぎみに推移するとみられる。

(昭和46年7月6日)